

自然との出会いから生まれる造形表現

葉っぱの観察を通して

The Art Born from Encounters with Nature

- Through Observation of Leaves -

久保田 貴美子

Kimiko KUBOTA

キーワード：図画工作・造形表現・自然

1. はじめに

本学の幼児教育科に入学してくる学生のうち、高校で美術を履修した学生は毎年1割程度であり、色や形、材質などで自己を表現する造形活動に戸惑いや劣等感を持つ学生は少なくない。したがって1年次に行われる図画工作の授業では、そういったコンプレックスを取り除き、造形表現活動の快さや楽しさを経験させるとともに、多くの学生が将来保育者となることから、乳幼児の造形表現についても関心を持ち、理解が深まるよう、実践を積み重ねている。

幼児の造形表現は、「感じる」ことと同じく人間の本能的な営みであって、「生きる喜び」となるはずである。そしてそれは誰かからやらされるのではなく、あくまでも自発的なものでなくてはならない。大人との信頼関係を基盤とし、豊かな材料、自然、生活などの環境と出会うことを繰り返して、幼児の感性は豊かになり、表現も深まっていく。日々の生活の中で生まれる喜びや発見や感動を、表現とつなげることによって、自己肯定感を感じ、心の豊かさを育むことができるのである。

入学後、最初の図画工作の授業では、彫刻家佐藤忠良の次のような言葉を紹介している。

図画工作の時間は、じょうずに絵をかいたり、ものをつくったりするのが、めあてではありません。じょうずにかこうとするよりも、見たり考えたりしたことを、自分で感じたとおりに、かいたり作ったりすることが大切です。しんけんに、絵をかき、ものを作り続けていると、じょうずになるだけでなく、人としての感じ方も、育ちます。このくり返しのなかで、自然の大きさがわかり、どんな人にならなければならないかが、わかってきます。これが、めあてです。¹

とは言え、何か描くとなると、本物そっくりに描かなければならない、上手く描かなければならないという、強迫観念のようなものがあり、なかなか自由に表現できないのが学生の実状である。そのため、造形表現をとおして学生が、豊かな心と生き生きした感性を持つことができるよう、また自己肯定感や達成感を持つことができるよう、日々、授業内容を検討し、より良いものに改善していくことを心がけている。

2. 自然との出会い

今年度、図画工作の第2回目の授業（2014年4月、受講者数98名）では、「木を感じよう」というテーマで、自然豊かな学内を散策した。普段何気なく見ている木々をあらためて見つめ直したり、触ったり、匂いをかいだり、五感すべてを使って自分なりに木を感じてみる。また、他者と対話をしたりするなかで、今まで見えなかったこと、気づかなかったことが、ふっと心に響いてくることもある。そうして感じたこと、考えたこと、心が動いたことなどを、色や形に表してみようという内容である。見てきた木をそのまま再現するのではなく、木の印象やイメージ、自らの身体から湧き上がる感情を、色や形に表すのである。

ある学生は次のような感想を持ち、画面いっぱいに木の幹を表現した（図1）。

私は木にぶら下がりました。その木は、私の重い体重に負けず、きちんと支えてくれました。その木の肌ざわりはとても温かかったです。痛いけど痛くない、人と混ざることのできそうな温かさでした。また木の幹の皮をはぎましたが、歴史の1ページをめくるような感じがしました。何年も何年もかけて輪が出来て、この大きさになったんだとこの木の長い歴史を感じました。はぐ時は、手の皮やかさぶたをむくみたいで楽しかったです。



(図1)

この学生は、身体感覚を伴う直接的な体験を通して、木と触れ合い、親しみ、自らと一体化させている。身近な自然を、新鮮なまなざしで見つめることで、その不思議さ、おもしろさ、心地よさを十分に味わうことができ、様々な発見や気づき生まれるのである。そして教室に戻り、たった今味わった感動、心の動きをクレパスで画用紙いっぱいに表現した。自分を支えてくれた太い木、温かく包んでくれそうな木、何年もの歴史を感じさせる木の幹、おそろおそろ皮をはいでみたら、意外にも楽しかったこと。作品は、茶系統のクレパスを何色も塗り重ね、木への深い愛着が感じられる表現となっている。

こうして身近な自然と関わりながら、そこで体験した思いを造形としてあらわすことで、学生の多くが持っている、造形表現活動に対する苦手意識を取り除くことができると考えている。

3. 葉っぱの観察

次に、「葉っぱの観察」というテーマで授業を行った（2014年5月、受講者数98名）。まず「葉っぱ」というと、どんな形を思い浮かべるか描いてもらった。するとほとんどの学生が図2のようなパターン化された「葉っぱ」を描いていた。幼児の造形表現では、そういったパターン化された既成概念ではなく、子どもの内面が素直にそして素朴な形であらわれていることが多い。したがって、学生が持っている既成概念をま



(図2)

ず取り除くことが必要と考えた。学生が普段「正しい」「当たり前」と思っていることに疑問を投げかけ、対象と新鮮な気持ちで出会ったり、関わったりする体験をさせるのである。そこで実際に学内に生えている葉っぱを10種類以上集めて、じっくりと観察し、スケッチブックに色鉛筆で描

写することとした。さらに1枚1枚の葉っぱの特徴や気付きを、言葉で書き出してみた。そうしている中で、ある学生が「葉っぱに名前をつけたら面白い」と言いだし、何人かの学生は、葉っぱに名前をつけることにも学習が発展していった。

以下に、この授業を受講した学生のコメントを何件か記す。(下線は筆者)

- 同じような形の葉でも、それぞれの葉の筋の入り方や表面の手ざわり、茎の感じ・太さなど全く違うことが観察してよく分かった。1年中よく見る種類の葉は、色が濃くて、冬にも夏にも強そうだなと思った。黄緑の葉は、ふにゃふにゃしていて色にあった優しいイメージになった。季節ごとに葉など植物を観察してみたいと思った。
- 葉っぱの大きさも全然違う。太いものもあれば細いものもあった。枯れ葉もあれば、赤くなっている葉っぱもあった。虫食いされている部分もあった。葉っぱによって脈が全部違う。葉っぱにも個性があるんだなと思った。
- いつも身近にあり、毎日のように目に入ってくる葉っぱなのに、こんなに形が一つひとつ違うことや、大きさが違うことに今まで気がつかなかった。とても新鮮な驚きがあった。こんなにマジマジと葉脈を見ると、すごくキレイで、葉っぱ全体に広がっていて、とても感動した。
- 自分が最初に考えた葉っぱとは違う葉っぱばかりで、よく見る葉っぱもしっかり観察するとうっすらと毛が生えていたり、湿っていたり、爪を立てると葉独特の青い匂いがしたり、とても楽しかった。春はまだ黄緑っぽくて、夏になるともっと緑が濃くなっていくのかなと思った。
- 似たような葉っぱもそれぞれ違いがあって、見れば見るほどおもしろかった。顔を描いたり、名前をつけたりしたら愛着がわいた。捨てるのがかわいそうだった。
- 今日は外に出て自分の好きな葉っぱを10枚取り、観察しながら描いた。葉っぱは葉っぱでも1枚1枚じっくり見てみると、全く違っていた。また緑は緑でも、薄いのや濃いのに茶色っぽいのもあって、面白かった。葉っぱの名前が分からなかったのも、自分でその葉っぱに合った名前をつけてみた。楽しかった。
- 葉っぱはそれぞれいろいろな個性を持って一つひとつキラキラしていた。木についていた葉っぱ、下に落ちていた葉っぱ、それぞれ落ちている、生えている場所は違うけれど、それぞれの場所で生き生きと輝いていた。子どももこんな気持ちで、自分のキレイだなと思う葉っぱを見て、楽しく集めているのだと思った。
- 多くの葉っぱを見てきたが、みんな個性がある。名前を付けることでより個性が出てきた。形や表面、網状膜など、さまざまに違うので面白い。大きくなるにつれて葉っぱに触れることや見ることが少なくなるので、いい経験だと思う。葉っぱには多くの種類があって、また葉っぱもみんな違ってみんないいんだと思った。
- 葉っぱを観察すると、一つひとつ形が全部異なっていた。この時期なので全体的には緑色の葉っ

ばが多いが、中には赤や黄色に色づいているものもあった。今日の授業で五感の「見る」という感覚を特に養うことができたと思う。よく観察すると一つひとつの違いに気づくことができ面白かった。

● 枯れ葉でも葉脈はしっかりあって面白かった。普段何気なく生えている葉っぱでも、一つひとつ特徴があることに気づいた。色や模様もそれぞれ個性的で楽しかった。同じ葉でも友達とイメージが違って面白かった。

● 1枚1枚づくりが全然違うし、色や形も違ってすごいとあらためて思った。まじまじ葉を見てみると、虫が**いっぱいいたけど、気持ち悪いとは思わなくてびっくりした。**

● 緑の葉が多かった。虫に食べられている葉、枯れそうな葉、元気な葉など様々だった。よく観察すると葉脈もさまざまで葉っぱはすごいなと思った。ツルツルの葉が気持ちよかった。

● 葉っぱを描いてと言われたら、常に記号化されたようなものになるけど、実際に見ながら描いていくと、葉脈がハートの形になっていたり、デコボコしていたり、さまざまな形が見られたから面白いなと思った。子どもたちと一緒にやったら、ネーミングとか色の使い方とか大人とは異なるんだろなあと思った。

● 普段は全然気にしないで歩いている道にもたくさん葉っぱがあることが分かった。また葉っぱもそれぞれ大きさや色、触りごちが全然違うことを知ることができた。取ってきた葉っぱを絵に描くときには、緑だけではなく、黄緑や黄色、赤や黒、虫に食べられて穴が開いている葉っぱなどたくさんあった。ただの葉っぱだけど、1枚だけで子ども達との会話が増えそうだなと思った。

● 葉っぱにもいろいろ種類があって描くのが楽しかった。色を再現するのが難しかったけど、私は虫食いされた葉っぱを描くの**に夢中になった**。真ん中だけ虫食いされた葉っぱを描いている時、ここがおいしかったのかな？とか想像して、面白かった。

学生のコメントから、今回の授業における具体的な成果をいくつかあげることができる。

1つめは、対象（葉っぱ）をじっくりと観察することによって、葉っぱそのものが持つさまざまな特徴に気付くことである。自然と出会い、感動するような体験は、自然に親しみを持ち、愛情などを育てるばかりでなく、科学的な見方や考え方の基礎となるものでもあり、多くの学生がそのことに気付いたようだ。特に「見る」という動作、感覚を通して、新しい発見をしたり、感じたりすることは、豊かな感性を養う上でも重要であると思われる。

2つめは、学生のリアルな感覚、感情が、素直に作品やコメントにあらわされたことだ。先に挙げたパターン化された葉っぱではなく、自然の中に実際にある葉っぱは、さまざまな色や形、手触りなどがある。そのことに気付いた学生が、あらためて葉っぱと向き合い、かかわった時に生まれ出た感覚や感情は、誰のものでもなく、まさに自分の内面からおのずと湧き上がったものである。

3つめは、葉っぱの観察を通しての自己内対話が行われたことだ。顔をかいたり、名前をつけたりして擬人化することにより、葉っぱ1枚1枚が個性を持ち、かけがえのない存在であることに気

付く。また葉っぱの気持ちになりきることで、今までの自分の思い込みや殻のようなものを破ることもできる。葉っぱの存在をあらためて意識することが、自らをふり返るきっかけとなり、ただの葉っぱが自分にとって、とても価値のあるものとなるのである。

4つめは、子どもの気持ち、子どもの視点にまで考えが至ったということだ。自分は葉っぱを見てこう思ったけれど、子どもならどんなことを感じたり考えたりするのだろうと、子どもの気持ちになってみる。このことは将来、保育者となった時、子どもの気持ちに共感する、また子どもが主体的に環境にかかわっていくよう援助するという視点からも大切なことである。

このように、あらためて自然（葉っぱ）と向き合い、じっくり観察することで、今まで見えなかったものが見え、気づかなかったことに気づくようになる。葉っぱをどのように表現するかは、あくまでも学生本人の自発性にまかせたので、ステレオタイプの決まりきった色や形になることなく、学生の思いがぎゅっとつまった、ユニークで楽しい作品が多く生まれた（図3～図10）。

4. まとめ

造形表現というと、「上手く」「作品」を仕上げなければならないと構えてしまって、なかなか自分の思いを素直に表現できない学生も多い。しかし、幼児の場合、大切なのは「作品」の出来栄ではなく、そこに至るまでの心の動きやプロセスなのである。将来保育者となる学生も、この点をよく理解し、自らも幼児の視点で造形表現活動を行うことが、まずは必要なのではないだろうか。そのためには、身近にある自然は恰好な素材であると思われる。

葉っぱをよく観察してスケッチするという授業の目的は、葉っぱを見たとおりに描くことでもないし、完成度を求めたりすることでもない。スケッチするということを通して、1枚1枚の葉っぱとどのように出会い、何を感じたのか、葉っぱという自然の持つ意味についてあらためて考えるきっかけとなってほしいのである。スケッチは目的ではなく、あくまでも手段の一つなのである。とは言え、見たとおりに描くことが難しい、また今回は12色の色鉛筆でスケッチしたため、微妙な色合いが表現できない等、葉っぱの描写（再現）そのものに神経が集中した学生も何名かはいる。この点に関しては、授業の導入や進め方、個々に応じた声かけ等、さらに改善していく必要があると思われる。

幼児期において自然の持つ意味は大きい。自然との出会いが豊かな感情や好奇心をはぐくみ、思考や表現力につながっていくことを理解し、将来保育者になった時、子どもたちにもこの経験を伝えていってほしいと思う。

脚注

- 1 子どもの美術 現代美術社

